

中学、武道必修化に向けての 小児脳神経外科医の役割について

藤原 QOL 研究所 代表

元都立墨東病院脳神経外科医長

藤原 一枝

はじめに

2012年春から中学1.2年生の体育の時間に、男女とも武道が必修化されます。近年の子供達の体力やモラルの低下などを憂えて、2006年12月に教育基本法が改正され、それを踏まえる形で2008年3月に改訂された「新学校指導要領」に盛り込まれたのです。武道の選択肢は柔道・剣道・相撲ですが、個人ではなく、学校単位で一つを選びます。

既に自信をもって柔道や剣道を教えてきた歴史のある学校や教諭がいる一方、武道とは無縁の体育科教諭もいます。しかも外部講師に頼るのではなく、校内教諭が指導教育に当たることが明記されています。指導者の質が保障されないのではとの懸念に、数年前から各種の研修会が実施されて来たことも事実です。

そして、現時点で7割前後の学校が、柔道を必修化することに決めています。

ところが、柔道に怪我はつきものと考えていたような通念では通用しないような、“学校で行なう柔道”の過去の事故事例が、2010年明らかになってまいりました。

柔道事故の実態と報道

1983年以降の中学・高校での学校内リスクを調査研究してきた内田良先生（現・名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授）のスポーツ事故の詳細な分析が明らかにした事実は衝撃的でした。

「学内(授業・部活)でのスポーツ人口あたりの死亡者数がダントツに高いのが柔道である(年に4人以上亡くなっている)。柔道固有の動作による頭部外傷に起因した死亡や重篤な後遺症が多い(中学生では77%が頭部外傷であった)」という内容です。

2010年6月に全国柔道事故被害者の会”が開催した「柔道事故と脳損傷」第1回シンポジウムで、

内田先生は「柔道はなぜ危険なのか？ 学校リスクの視点から考える」を講演し、次いでボクシングコミッションドクターの脳神経外科医・野地雅人医師（神奈川県立足柄病院）の「コンタクトスポーツと脳損傷」、虐待防止の立場からNPO法人理事長の山田不二子医師の「厳しい練習としごきの境」と講演が続き、柔道事故の人災の部分に初めて焦点が絞られました。

主催者の家族には、中学3年生の時の指導教諭との部活時間の柔道事故で硬膜下血腫の手術もし、麻痺や高次脳機能障害を残している息子さんを持つ方がいました(当時は刑事事件にはならず、民事事件で2011年12月27日勝訴しました)。このシンポジウムの記録は家族が所属するNPO法人日本脳外傷友の会の出版した「高次脳機能障害とともに――制度の谷間から声をあげた10年の軌跡」(せせらぎ出版 2011年)に9ページに渡り収録されていたので、1月に目にしました。

6月には日本テレビでNNNドキュメントとして、「昼の上の警告 続発する柔道事故と中学必修化」が30分番組で放映され、驚異の事故数を挙げ、事故後の学校や担当者の真摯ならざる対応を告発する内容でしたが、真夜中0時50分からの放送で、見た人は少なかったことでしょう。

もちろん、番組では、全日本柔道連盟が指導者達に独自の研修体制を組み始めたことも報道されていましたが、全柔連にとっては辛口の番組であったと思います。

脳神経外科医にとって

脳神経外科医の関心は、柔道事故による頭部外傷の中でも最も致命的な硬膜下血腫にあります。これは大外刈りや背負い投げなど、頭を激しく揺さぶる技で起こりやすいのですが、手術室に運ばれた時点で、まず救命がやっとの手術になります。出血量よりものすごい脳腫脹との闘いです。

事故を未然に防ぎたいという気持ちが強く湧き上がります。「頭を打たなくても、投げ技で架橋静脈が切れることもある」し、「受け身の練習だけで、後頭部を打って死んでいる」のです。

また、最も強調すべきは、中学でも高校でも「柔道事故は受け身のとれない初心者に圧倒的に多い」のです。授業が理論と実技をどのように行なうか不明ですが、初心者を大量に実技に導くのですから、受け身だけの授業だと言っても、事故予備軍は大量です。受け身が安全だという証拠はないのです。

となりますと、医者の出番は手術室ではなく、学校であり、指導に当たる教師や柔道家の前であります。「今まで、ここでは事故がなかったから」は理由にならず、過去の事例に学ぶことと、最新の医療知識を習得した上で、危機管理・安全指導の体制を考えてほしいと願ってのことです。

墨田区は24万都市、区立中学は12、うち柔道部のある学校は2校、部活の指導に当たる柔道家の一人がPTA仲間であり、彼は校長、そこから校長会へ、私は医師会や保健所経由で、共に教育委員会に達しました。「少なくとも墨田区内で、授業の柔道で頭部外傷を起こさないように」との願いは、12月12日に体育教師と柔道指導者・校長を対象に医学的な研修を行なうことになりました。

しかし、私は門外漢であり、自分が中学生で必修化されたら、当日は休むだろうという人間です。乱取りの意味を辞書で引いて、「自由に技をかけ合って練習すること」と分かり、「エッ、対応可能かな？」と驚く人間です。

そこで見渡すと、小学2年、7歳から柔道を始め、33歳までは試合に出ていた有段の整形外科医が傍にいました。彼も必修化に危惧を持っていて、協力してくれるというのです。大きな怪我なくやってきた彼の次のような意見はおおいに参考になります。

「適切な指導によって、頭を打たない投げかた、頭を打たない受身のとり方を身に着けることが大切かと思います。

授業で柔道を行う場合、とくに柔道が初めての生徒同士で行う場合には、押したり引いたり相撲のような感じになり、スパンスパンと投げる投げられるという場面は多くはないかもしれません。しかしだからといって頭を打たない投げ方、受身

のとり方がそれほど重要でないかというのと、むしろそれは逆で、下手同士なので身を守るためにはより一層頭部の安全を守る方法を身につけなくては行けないかと思います。

四肢に関しても同様で、投げられたときにまず手を着くのではなく、きちんと受身をとることが大切だと思います」。

彼とタグを組みました。

危惧する事の一つ

学内での事故で恐れていることの一つに、生徒同士の事故の発生があります。部活ではありますが、初心者である中学2年生が、体格も大きく柔道歴も長い中学1年生に負けん気だけでしがみついている負け、硬膜下血腫の手術を受け、左半身の麻痺を残しました。当院での手術でした。

長い長いリハビリの後、大学やさらにパソコン専門学校を卒業して就職し、28歳。たまに顔を出す彼も柔道必修化にメッセージを寄せてくれました。

「まず、柔道は遊びではありません、危険なスポーツです。怪我の程度にもよりますが自分や相手の人生を変えてしまう事もありますので、なるべく怪我の無いようにして下さい。

まずは受け身を体に覚えさせてから、投げられる練習で受け身の取り方を学び、投げる練習は投げ方を学んでからにして下さい。相手を思いやる事が大事です」。

含蓄に富んだ貴重な意見でありました。

日本にあって、フランスや英国に少ない事故！

ところで、柔道人口の多いフランスやイギリスで頭部外傷が極めて少ないことには、指導体制やガイドラインの役割が強調されています。

フランスに住む男児二人の母親に聞くと、「こちらでは5.6歳ですと、ベビー柔道といって、年齢に適応した柔道の基本をやるようです。学校でのスポーツは水泳や球技が中心です。学校内のクラブ活動はなくて、あっても昼休みにお遊び程度にやるくらいです。クラブ活動のしごき精神のようなものはありませんよ。

スポーツをやりたい場合、子供達は、学校外の

地域のクラブに入って、競技に参加することになります。どんなスポーツをするにしても、必ず医者
の証明書（このスポーツをやるのに支障はありません）が必要です。指導者には高等教育の後 2
年間の専門教育が義務付けられています」と。

英国柔道連盟は、柔道を行う子供達全員に畳の上で楽しい前向きな経験をしてもらえるようにと、「児童保護の方針・手続き・ガイドライン-安全な着地」を持ち、コーチやスタッフに研修を行っています。事故予防にはまず、指導者の質が担保されなければならないという考えです。

柔道を勧められない疾患

隣が柔道場でもあって、乱取りをするお兄さん達に憧れて、6歳から毎日柔道の練習を行っていた8歳の男児が、5月末に夕方の乱取りの後、ボーッとした状態で寝込み、翌朝から激しい頭痛と嘔吐に襲われました。頭部CTに出血はなかったのですが、以前から存在していると考えられる”くも膜嚢腫”が右の側頭部(中頭蓋窩)に発見されました。ほどなく元気になりましたが、練習を再開すると、たちまち頭痛と嘔吐です。

セカンドインパクト症候群も考えねばなりません。頭部事故の後の、スポーツ再開にも厳しい観察と理論が必要です。そんなことも、競技現場の指導者皆が知っていることではありません。

この部位のそう小さくはないくも膜嚢腫の手術に、小児脳神経外科医達は慎重です。ただ、一旦外傷を受けた時にはくも膜嚢腫のある側に硬膜下血腫を起こす可能性が高いので、柔道、ラグビー、サッカー（ヘディング）などコンタクトスポーツは避けるように指導します。今回、母子は簡単に応じました。中学生になったら、「学校生活管理指導表」に、柔道は出来ない旨を記入せねばなりません。

くも膜嚢腫に準ずるような疾患は他にもあり、脳神経外科医は、その方面からも子供達を守っていかねばなりません。

そこで、提言します

小児脳神経外科医を専攻する諸氏に訴えます。柔道必修化の是非の論議もありますが、まずはよ

り安全な環境が整ってから武道が始められるように、私どもの知恵を結集し、目の前の事故頻発を避けるように声を挙げ、学校現場に足を踏み入れていこうではありませんか。